

木蠟資料館 上芳我邸

The Kamihaga Residence

もくろ
木蠟づくりで一時代を築いた内子の商家

愛媛県の内子町は、かつて、金刀比羅宮参拝の旅人が行き交う松山街道の宿場であった。明治期には上質の蠟の産地としても知られ、世界にその名をとどろかせた。製蠟で財をなした豪商の一軒が木蠟資料館上芳我邸として公開され、往時の姿を伝えている。



豪大な構えの主屋から上芳我家の繁栄ぶりがうかがえる。多くの職人を抱えていたため、炊事場(右)も大きい



最盛期、内子には23軒の蠟商があった



蠟を精製する釜場。生蠟は日に晒すと白くなる

The mansion of Uchiko's wealthiest and most influential wax merchant family

Long ago, Uchiko in the Ehime prefecture, Japan thrived as a post town of the Matsuyama Kaido road, where worshippers heading for the Kotohiragu Shrine passed through. In the Meiji period (1868-1912), the area garnered a worldwide reputation for the production of high-quality Japan wax. The Kamihaga family was one of the most influential merchant families in Uchiko, and made its fortune in the wax production business. Today, this traditional property is used as a museum with informative exhibits that show the lifestyle of merchants and the methods of production at that time.



主屋の店の間。涼しい床下に蠟を保管するスペースが設けてある



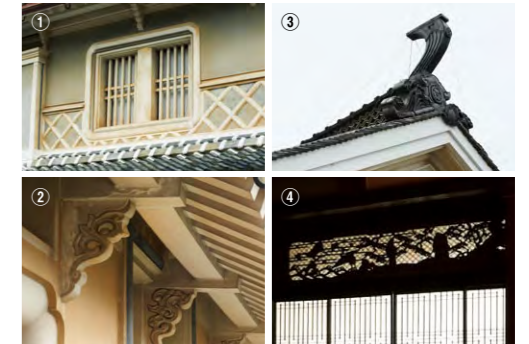
坪庭を囲んで部屋を設け、回廊で行き来した



かまどや洗い場など、当時の炊事場の姿がよく残っている



風呂場。床は余熱で温められる仕組み



①虫籠窓 ②持ち送り ③鳥ぶすま(上)と鬼瓦 ④書院の合わせ欄間

江戸時代、内子では大洲藩の殖産興業の施策によってハゼを栽培。実からろうそくの原料となる木蠟を生産した。内子最大の蠟商・本芳我家の弥三右衛門が江戸後期に新しい製法を考案すると品質は向上、生産も効率化して明治期には輸出を行う世界的なブランドとなった。上芳我家は本芳我家の13の分家の一つで、蠟を生産・販売した豪商である。

上芳我邸は、蠟垣と呼ばれる防犯用の垣根を巡らした広大な敷地に主屋などの居住棟と、釜場や出店倉といった蠟の生産

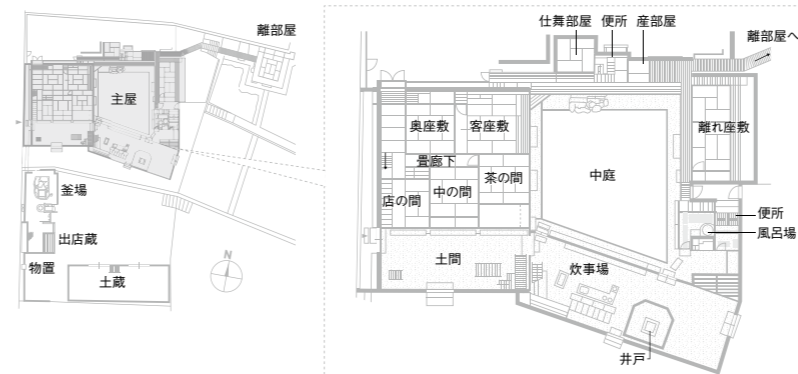
施設が残る貴重な遺構である。土蔵造の主屋は旧街道側の2階に虫籠窓、1階に出格子が見られるほか、製蠟作業場に面した南面は浅黄色を帯びた漆喰壁で、腰をなまこ壁としている。これらは内子の伝統的な商家のたたずまいである。また、2階の座敷が建設途中のみであるために、重厚な小屋組が見られるのも特徴。

南面のひさし付き窓には明かり取りと、中庭での作業をのぞく用途があったと考えられている。主屋はその棟札から、商いの最盛期頃にあたる明治27(1894)年建造と

知られ、その後、約10年の歳月を費やして炊事場や仕舞部屋、産部屋、離れ座敷が普請された。

良質の材木を多用した主屋の風情をはじめ、こて絵を施した持ち送りや帆かけ型の鳥ぶすま、客間の合わせ欄間の装飾にも風格が漂う。このように住まいを立派にしつらえた背景には、都会から来る商人と対等に取引しようとする狙いがあったともいわれている。

平成2(1990)年、建物10棟と敷地は国の重要文化財に指定された。



用語説明

- 【虫籠窓】 虫籠のように目の細かい格子をはめた窓
- 【こて絵】 左官の道具・こてで漆喰を塗り、さまざまな模様を描いたもの
- 【持ち送り】 壁から突き出したひさしなどを支える部材
- 【鳥ぶすま】 鬼瓦の上にある、反って長く突き出した瓦。雀瓦
- 【合わせ欄間】 表裏でデザインが異なる欄間